

登校拒否への理解を深めてもらおうと、「山梨不登校の子どもを持つ親たちの会」(ぶどうの会)代表の鈴木正洋さん(68)=笛吹市一宮町=が冊子「登校拒否・不登校 その意味と対応―子どもを信じて待つとは」を発行した。登校拒否に悩む多くの親から相談を受けてきた経験を基に、登校拒否の子どもの心理状態や、親の適切な対応などを具体的に紹介。苦しい親たちに子どもを信じて待つことの大切さを伝え、登校拒否への社会の偏見がなくなるよう願いを込めている。

「山梨親たちの会」代表・鈴木正洋さんが冊子出版

ぶどうの会発足から6年間、登校拒否に悩む150組の家族から相談を受けてきた鈴木さんは、子どもと親の心理状態や行動パターンに共通点があることに気付いた。冊子にはその共通点をまとめ、登校拒否の子どもの特徴や回復までの道のり、親が取るべき対応などをまとめている。

【登校拒否は

心の傷。外傷と同じで回復には

時間がかかる」と鈴木さん。しかし、多くの親は早く学校に行くよう促す。「学校に行きたくても行けないのが登校拒否。苦しんでいるのだから、無理強いしては追い詰めてしまう」

一番の支援者は親

学校に行かなれば進学も就職もできない。子どもは明日の見

対応紹介 「偏見なくす一助に」

えない状態に苦しみ、「生きていてもしようがない」とまで自己否定する。親は登校拒否の原因を必ず探し、医師やカウンセラーに解決策を求めるが、「子どもの一番の支援者は親。親が子どもを信じて登校拒否を受け入れれば、子どもは変わっていく」

鈴木さん自身、長男の正輝さん



発行した冊子を眺める
鈴木正洋さんとほづみ
さん。登校拒否に悩む
親に「テキストのよう
に使ってもらえば」
と話す=笛吹市一宮町

つみさんは離島の住民が家族のように正輝さんを見守ってくれたことから「親や学校だけではなく、地域の力も重要」と考る。しかし、地域には登校拒否になるのは急げで、親が甘やかしているから」という偏見が根強いと鈴木さんは感じている。子どものことを聞かれるのが怖くて人に会えなくなり、心中まで考える親もいるという。

正輝さんは学校に通えなかつたときには適切な対応ができないが、妻のほづみさん(32)は最初は絶望感しかなかった」と振り返り、登校拒否について学ぶうちに正輝さんの苦しみが理解でき、学校に行けない状態を素直に受け入れられたといふ。「息子からは『お母さんが変わって、僕も楽になつた』と言われた。子どもは敏感だから、納得して受け入れる」と指摘しは

ことが大切」と強調する。

鈴木さん夫妻は冊子に込めた思いについて「登校拒否への偏見がなくなる一助になれば。登校拒否を自分なりにつかみ、沖縄の離島での生活を経て、今は埼玉県内の大学に通っている。

地域の力も重要

冊子は700円で千部発行。冊子とぶどうの会の問い合わせは鈴木さん、電話0553(44)5078、ファックス0553(44)5079。

冊子に掲載されている「親の対応集」の抜粋

■共感

苦しみやがきを親がわからうとする気持ちが、子どもの心を癒す基本的な道です。子どもの心を感じ取って、「そうだよね」と共感してあげることです。

■寄り添う・見守るとは

「この場所に子どもが居たいだけいてくれればいい」、そう親が思えることが大事です。子どもの心に近づく努力を重ねることが「見守る」ということです。

■親が学ぶこと

学んだことで親が変わることは、悩みや不安がなくなるということではありません。そのって考えるようになることです。

■学校との対応

感情的にならず、登校拒否について理解してほしいという思いをどう伝えるか工夫します。できたら1、2カ月に一度学校を訪ね、「家で子どもはこんなふうに過ごしています」と伝えます。



「登校拒否・不登校 その意味と対応」の表紙